中日・東京新聞 朝刊生活面 08.2.20

ファミリー

命の大切さ 親子で考えよう

命の輝き

NPO法人
いのちを
バトンタッチする会

鈴木さん 思い込め体験語る

親子一緒に、命の大切さや家族のきずなを考えようと、NPO法人「いのちをバトンタッチする会」（事務局・名古屋市）は各地で「いのちの授業・親子塾」を開いている。小児がんで娘を亡くした鈴木中人さん(五〇)＝愛知県豊田市＝の熱い思いを込めた活動だ。（安藤明夫）

「大学病院の小児科病棟には、四十のベッドがありました。みんなと同じような保育園や小学校や中学校のお友達がいました。半分は小児がんの子でした」

一月下旬に、名古屋市内で行われた親子塾。代表の鈴木さんは、約五十人の親子に語りかけた。

長女の景子ちゃんは三歳の時に神経芽細胞腫を発病。治癒率15%と宣告された。苦しい治療や検査に耐え、奇跡的に回復して保育園へも通えるようになったが、脳への転移が発覚。小学校入学から三カ月後の一九九五年七月、六歳の命を閉じた。

最後まで前向きに生きた景子ちゃんの姿に感動した鈴木さんは、大手自動車部品メーカーのデンソーを早期退職し、命の輝きを伝える市民活動に情熱を注いでいる。

「入院して四カ月ほどたったころ、景子ちゃんが〝私、天国に行っちゃうの？〟って聞きました。それまで、三歳の子が死について考えるはずはないって、思っていましたが、間違いでした。本能で分かるんです。お父さん、お母さんの様子を見て、景子ちゃんはずっと心配していたんです」

「小学校に入学して五月から車いすの生活になりました。長い間のお薬の影響で、骨にひびが入り、ちょっと歩くだけで折れちゃう。目の周りはパンダみたいでした。でも、恥ずかしいとか、外へ行きたくないとか一回も言わなかった」

「いのちを感じる」と題して思い出を静かに語る鈴木さんに、会場は涙に包まれる。「景子ちゃんから教わった三つのこと」として、鈴木さんは、①今を一生懸命に生きれば、命がいっぱい輝いていく。その輝きは死んでもなくならない②人にやさしくなれる人は、みんながやさしくしてくれる③いつも「ありがとう」って言うと、幸せになれる―の三つを挙げ「これから生きていく中で、大切な人を必ず失う。でも、会おうと思えば会える。生命には、体のいのちと心のいのちがあるから」と話した。

続いて、車いすに乗ったり目隠しをして歩く「いのちを体験する」の時間。障害の大変さ、助け合いの大切さを実感したうえで、「アリとキリギリス」の寓話（ぐうわ）を例に「条件によって助ける命と助けない命があってはいけない」と教える。

最後は「いのちを語り合う」。感想を話し合い、カードにまとめるなどして思いを共有する時間だ。「お父さんお母さん、ありがとう」「妻に感謝」など、普段は照れくさい言葉が自然に出てくる。

同会は〇五年の設立以来、学校などで講演形式の「いのちの授業」を各地で開いているが、親子一緒に参加できる場も必要と、「親子塾」を設けた。開催の申し込みを受け付けている。問い合わせは事務局＝☎052・581・8686。同会ホームページは、http://hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/index.html

車いすを体験する親子に質問する鈴木中人さん＝名古屋市中村区で